

# 2017 年度女子日本代表 活動報告

## 1. 活動方針

### ● 強化方針

(1) 戦力よりも個々ベースの強化を行い、世界大会で5位以内を目指す。

\*個々として対峙を避けずにしっかりと勝負する。

\*3つの局面における DUEL（ニュートラルボール、シュート、1on1）

(2) 走力よりもパワーを重視したフィジカル強化

\*アコーディオンという戦術により、体力的消耗を抑え、その分当たり負けをしないパワーをつけることを重視。

(3) 今後10年間日本のラクロスの中心となる人材の育成：社会性の向上

\*強いチームには高い社会性が必要との考えのもと、リーダーシップを重視。

リーダーシップとは、『いついかなる時も自分の考えと能力を発揮し、組織に良い影響を与える』と代表では定義。

## 2. 活動結果

(1) 2017年FIL女子ラクロス世界大会

参加25ヶ国中 9位

7勝1敗（予選POOL）4戦全勝。（PLAYIN GAME）惜敗。（プラチナブラケット）3戦全勝

(2) ワールドゲームズ2017

参加6ヶ国中 5位（1勝2敗）

（予選） 2戦2敗 5, 6位順位決定戦 勝利

## 3. 強化方針、目標設定のレビュー

(1) 順位

世界大会の目標5位のところ、最終結果はPOOL B 1位のイスラエルとのPLAY-INゲームで惜敗。

結果、チャンピオンブラケットには上がれず、次のプラチナブラケットで全勝し、最終9位で終える。

<具体的に感じたTOP4, TOP8との差>

\*世界ではラクロスは点を取るゲーム。国内リーグよりはるかに攻撃、点を取ることを終始考えたゲーム運びをする。守って勝つ、逃げ切って勝つは通用しない。

点を取っていく上で、現在の他国との差は、シュート率とゴール裏を起点にPLAYができるプレイヤーの存在であった。

(2) シュート

“点を取る、シュート率を上げる”のために、『ボール1個分のスペースを通す精度に問題』があった。

国内ではシュート決定率は、20~30%（学生1部、クラブチーム1部試合データ分析からの抜粋）

しかない。その要因は以下と考える。

\*20%、30%が当たり前であるという意識の低さ。（ロースコアゲームでも良しとする風潮）

\*ミドルシュート（FS時ワンステップ等含む）が打てない。

\*ランニングシュートは、Gの腰から下にしか打てない。

\*シュートをシューターの都合とタイミングで打っている。Gとの駆け引きができていない。

これらを改善するためには、

\*当たりに外さないよう意識改革

\*遠投等で遠くに飛ばす力をつける

\*ランニングシュートの上段ポスト下に打ち込む練習

\*シュートは、Gのタイミングを外し、打つ練習

\*シュート技術を各選手がそれぞれ練習等するのではなく、チームとしてGをモニタリングして、弱点のエリアに徹底して打つ。

3月の英国遠征時は、世界大会3位のイングランドと前半6-6（シュート決定率70%）と、ある一定の成果は残したが、世界大会では、イスラエル戦で30%台とシュート率の低さがそのまま試合結果へ繋がった事は否めない。その違いは、英国遠征時はシュートコースを選手に対し限定したが、世界大会時にはそれらを選手に任せて対応したことにある。上記の要因からの練習は行ってはいたが、世界大会中に選手各々が意識して行うシュートが、無意識で行なわれる状態まで持っていかけてなかったこと、また試合中にそれを意識付けする、対策をとることができなかつたことは、練習の過程と決定に問題がまだあると考えるため、継続して改善が必要である。

### (3) アコーディオン

ポジションを固定せず、自由にリストレイニングラインを行き来する事により、体力を消耗せず、相手のライド戦術の混乱を誘発し、フルフィールドオフENSEを効果的に行う、この戦術は世界大会及びワールドゲームズを通して、全試合の平均クリア率は90%を超えることができ、アメリカ、カナダ等の強豪国相手でも、効果が証明できた戦術であった。

### (4) ニュートラルボール（主にドロー戦術）

	チーム情報			白チーム獲得ドロウの内訳				
	日本	相手	日本のドロウ獲得率	直キヤ	自キヤ	GB	ファウル	
1	ドイツ戦	14	7	67%	0%	0%	93%	7%
2	ラトビア戦	20	4	83%	5%	20%	65%	10%
3	メキシコ戦	22	8	73%	9%	18%	55%	18%
4	スペイン戦	23	7	77%	9%	17%	57%	17%
5	イスラエル戦	12	8	60%	0%	8%	83%	8%
6	韓国戦	11	6	65%	27%	9%	64%	0%
7	イタリア戦	12	12	50%	8%	33%	50%	8%
8	チェコ戦	11	7	61%	9%	9%	73%	9%
平均				67%	8%	14%	67%	10%

  

	チーム情報			空中戦分析				
	日本	相手	相手直キヤ	全ドロウ内の割合	相手自キヤ	全ドロウ内の割合	白チーム自キヤ、直キヤ	
1	ドイツ戦	14	7	2	10%	0	0%	86%
2	ラトビア戦	20	4	1	4%	0	0%	84%
3	メキシコ戦	22	8	0	0%	0	0%	83%
4	スペイン戦	23	7	0	0%	0	0%	87%
5	イスラエル戦	12	8	3	15%	0	0%	79%
6	韓国戦	11	6	0	0%	0	0%	100%
7	イタリア戦	12	12	2	8%	1	4%	79%
8	チェコ戦	11	7	0	0%	2	11%	81%
平均				-	5%	-	2%	85%

## Team roster

#	Name	GP	G	A	SOG	SOFF	LB	DW	DC	CT	TO	C	PC
3	Banno, Sayako	8	9	8	11	1	5	-	4	-	5	-	-
11	Gondo, Mami	8	13	2	16	3	2	-	2	1	3	-	-
14	Hieda, Saori	8	9	7	16	4	19	35/53	21	9	1	-	-
9	Hirose, Ai	8	1	1	2	2	5	-	4	2	3	-	-
1	Iwata, Maiko	8	-	1	-	-	9	-	-	2	1	-	-
17	Kemmochi, Mai	8	13	5	19	1	5	-	25	3	1	-	-
6	Kobiki, Chihiro	8	2	3	9	1	-	-	2	2	3	-	-
7	Konishi, Nana	8	15	16	28	1	4	-	3	3	19	2	4
5	Matsumoto, Risa	8	2	-	4	2	12	43/64	16	4	7	-	-
10	Noo, Asuka	8	7	1	9	3	1	-	2	-	4	-	-
13	Nukui, Narumi	8	9	3	10	2	5	11/14	4	2	4	1	2
24	Ogawa, Eriko	8	13	3	19	12	4	2/5	7	-	10	-	-
4	Sato, Tomomi	8	10	2	14	1	7	32/47	16	4	2	-	-
21	Takahashi, Mio	8	18	7	22	7	6	-	7	1	14	-	-
12	Takano, Hikari	8	3	4	5	-	14	-	7	5	6	-	-
19	Taniyama, Natsuki	8	2	3	4	-	9	-	1	5	1	-	-
16	Teranishi, Shihomi	8	5	4	7	-	10	-	3	2	3	-	-
2	Tomita, Mayo	8	-	-	-	-	3	-	-	-	1	-	-

今回のテーマとして、体格で劣る外国選手に対し、『地上戦に持ち込んで勝負する』ということ掲げた。その対策としては、ドロウ時の1<sup>st</sup>チャンス（＝空中戦）での相手選手直接キャッチ、自キャッチの獲得率を低く抑え、2<sup>nd</sup>チャンス（＝地上戦）に持ち込むこと、そして地上戦をできる限り有利なエリア（＝チャンスエリア）で行うために、チャンスエリアを意識する練習を重ねた。

結果として、世界大会を通して、相手の直キャッチ、自キャッチ封じに徹し、地上戦に持ち込み高い2ndチャンス発生率を維持できた。日本チーム獲得ドロウの内訳でも、GBでの獲得が平均67%と圧倒的な高い水準となった。

日本国内では直キャッチ、自キャッチを容易にできる選手達が、セカンドチャンスを意識したチーム戦術に徹して全員でドロウ獲得への強い意識を持たせたことが、G以外の全選手にDC(ドロウコントロール)のデータがつき、成果に繋がった。

また、上述の通りドロワーを戦う上で、最も大切であったのは、全選手のドロワーへの意識改革であったが、それに加え欠かせない2つの要素として、①タイプの違うドロワーを複数人用意している（ドロワー方法、体格、強み等）、②ドロワー回りの直キャッチ担当の選手として、数名は高身長かつ素早く、外国人選手に空中戦で対抗できる選手がいることが挙げられる。この2点は、今度世界で戦う上で、日本にとって引き続き、重要な要素になると考える。

TOP 8 レベルでの対格差を感じさせない世界でのドロワー対策には、ある程度手応えを感じられた一方で、世界大会前の USA との練習試合やワールドゲームズでカナダとの対戦では、70%以上のドロワーを相手にコントロールされた。世界の TOP2 との大きな差は、ドロワーの自キャッチの技術であった。このレベルの相手に勝つためには、ドロワー個人の技術強化が今後必須となる。

#### (5) リーダーシップ

日本代表選手として、今後将来 10 年後までに繋がる活動を行っていく。

\*10 年間日本のラクロスの中心になれる人材の育成を目指し、世界との差を感じた選手達が自分達でクリニックや自チームへの還元をすでに始めている。

\*他国では 20 代後半、30 代の選手も多く、今世界大会、ワールドゲームズに出場した日本選手達は、まだまだ次回、またその次を狙える選手達である。2017 年代表選手で終わりではなく、女性としてのライフプランも加味し、世界大会後選手全員への個人課題として、『10 年後日本のラクロスを変えるシート』提出（1 か月後～2028 年ロサンゼルス五輪（予定）まで）、目標逆算で継続して、寄与することとしている。